

吉備国際大学研究紀要
(人文・社会科学系)
第24号, 79-91, 2014

江川三郎八と岡山県の江川建築

小西 伸彦

A Study on Egawa Saburohachi and his Modern Western-style Architectures in Okayama Prefecture

Nobuhiko Konishi

Abstract

Architect Saburohachi Egawa was born in 1860 in Fukushima prefecture. He became the Okayama prefecture architectural planner in 1902. Egawa designed numerous western-style government offices, hospitals, religious facilities, commercial buildings such as a department store, and residential homes until early Showa period. Furthermore, Egawa designed western-style buildings such as Kyokuto Kindergarten, Okayama City, and the Senkyo Elementary school building in Maniwa city, which were designated as important cultural properties. But his work is not evaluated highly in Okayama prefecture. This paper is a study on the feature and significance of western-style buildings including schools designed by Egawa in modern times.

Key words : Modern western-style architectures School buildings Okayama Prefecture Saburohachi Egawa
キーワード : 近代建築 学校建築 岡山県 江川三郎八

はじめに

2013(平成25)年3月、高梁市立吹屋小学校で閉校式が執り行われた。わが国最古の現役木造小学校舎として全国に知られ、弁柄と釉薬瓦の家並みが特徴の伝統的建造物群保存地区・吹屋ふるさと村のもう一つの顔

であった明治生れの小学校閉校のニュースは、新聞やテレビで取り上げられ、現在でも見学者が後を絶たない。校舎の保存を決めた高梁市は構造調査や耐震調査を行うと共に、活用策を模索している。

旧高梁市立吹屋小学校の創設時の名称は吹屋尋常高等小学校である。白井一臣は、『岡山県の近代化遺産-

岡山県近代化遺産総合調査報告書』で、設計・施工者を吉岡銅山技師・佐藤元三郎としている。

また同誌に掲載された津山市の旧土居銀行本店、旧倉敷町役場、勝田郡勝央町の旧勝田郡役所と旧勝間田農林学校本館、赤磐市の旧誕生寺尋常高等小学校、井原市の旧興讓館講堂、旧矢掛中学校明治記念館などには設計者の名前が記されていない。

ところが、永井理恵子や清水重敦、難波好幸らが、重要文化財に指定された真庭市の旧遷喬尋常小学校校舎と岡山市の旧旭東小学校附属幼稚園園舎など明治・大正期の木造校舎や校舎を調査・研究するに連れて、設計者不明とされてきた複数の建築物にある共通する意匠のあることがわかってきた。それは『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書¹』に詳述された。

岡山県では『目で見える岡山の明治²』や『写真集 岡山県民の明治大正³』、『岡山ハイカラ建築の旅⁴』、『岡山の木造校舎⁵』など、近代の建築物を紹介する文献が出版されてきたが、共通の意匠を持つ旧吹屋尋常高等小学校本館や旧土居銀行本店などほとんどの建物は設計者不明とされてきた。その不明に光を当てたのが『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』であった。

旧吹屋尋常高等小学校を調査・研究した清水が県内の木造校舎や庁舎などを調べた結果、共通する意匠やプロポーションを持つ建物が、福島県生れの建築士・江川三郎八の設計であると発表したのである。

難波は県内の木造建築の実測調査と模型制作を続けてきた。旧遷喬尋常小学校校舎や旧興讓館講堂なども難波がメジャーを当てた対象であったが、難波も江川建築の持つ意匠や構造に強い関心を寄せる技術者である。これら研究成果が、岡山県の行政機関や学校、金融機関、病院、宗教施設、商店の建物を洋風に導きながら、今まで知られることのなかった建築家の存在をクローズアップさせたのである。

筆者は2005(平成17)年に吉岡銅山の調査を始め、旧吹屋尋常高等小学校が三菱吉岡銅山の事務所移転跡地に建設されたことを知り、その本館と東西校舎のプロ

ポーションと意匠の違いに興味を抱いてきた。そして、県内の木造校舎に見られる意匠と吹屋小学校のそれに関連付けていた時に、難波との邂逅を得、数々の教授を受けた。

小稿は、江川建築の特徴を近代建築と小学校建築の歴史に照らしたものである。

1. 岡山における洋風建築のはじまり



写真1 ジョン・ベリー邸⁶

江川三郎八が岡山県技手に就任したのは1902(明治35)年である⁷。江川就任以前に建てられた洋風建築には、医師で宣教師のジョン・ベリーの設計により、1879(明治12)年に岡山市東山に建てられたベリー邸(写真1)がある。東山異人館と呼ばれたヴェランダ系擬洋風建築は、岡山県初の洋風建築とされているが⁸、施行したのは菱川吉衛である。菱川は1844(天保15)年、岡山市内に生れ、大坂の土木建築家・大倉善右衛門に師事した後、作事方として岡山藩に雇われた。廃藩置県後は岡山県御用達となり、岡山県庁などの官公庁や学校、警察などの建設を請け負った⁹。また、中国鉄道(現在の津山線)¹⁰や伯備線¹¹、山陰線¹²、日豊線¹³、高森線(現在の南阿蘇鉄道)¹⁴などの敷設工事、二代目門司駅舎(現在の門司港駅舎 写真2)¹⁵の建設も請け負っている¹⁶。辰野金吾¹⁷が設計した東京駅と同じ、1914(大正3)年に竣工した二代目門司駅舎は、1988(昭和63)年、鉄道駅として初めて重要文化財に指

定されたネオ・ルネサンス様式の木造建築である。



写真2 二代目門司駅舎(現在の門司港駅舎)

菱川の本業は建築で設計ではない。ベリ―本人がベリ―邸を設計したように、明治期初頭の岡山県に擬洋風建築の図面を引いた人物がいたはずである。岡山県が誕生したのは1871(明治4)年の廃藩置県の時、石関町の郡会所(郡部役所)に初代岡山県庁が置かれ¹⁸、1878(明治11)年、鹿島建設二代目・鹿島岩蔵の請け負いで天神町に新庁舎が完成した(写真3)¹⁹。建物はエンタシスのオーダーが玄関ポーチを支える擬洋風で、正面のペディメントが特徴的である。ファサードは玄関を中心に左右対称、玄関ポーチの上はバルコニーで、2階の上げ下げ窓の上部には欠円の装飾が施されている。初代の岩吉は町方大工であったが、岩蔵は大工でなければ技術者でもなく、プロデューサーであった²⁰。ところが後年、鉄道土木工事を請け負う会社に変更し、北陸線や信越線、山陰線、鹿児島線、朝鮮半島の京仁鉄道、台湾の阿里山鉄道、南満州鉄道などの敷設に携わり、鹿島組発展の礎を築いた²¹。



写真3 旧岡山県庁舎²²

高梁基督教会堂(写真4)は1889(明治22)年、今治の棟梁・吉田伊平が建てたものである。吉田は岡山市と

倉敷市天城にも教会を建てたが、岡山基督教会堂が第二次世界大戦で焼失したため、高梁基督教会堂が県内最古の教会堂となった。建物は下見板張りを基本に、上部に三角形のファンライトを配した上げ下げ窓を持つ。礼拝堂が畳張りからフローリングに変更され、旧札幌農学校演舞場(現在の札幌時計台)を真似た鐘楼が増設された以外に、竣工当時の大きな変更点はない。高梁市の順正寮は1896(明治29)年に竣工した下見板張りを基本とする和洋折衷木造建築である。設計者は不明であるが、1921(大正10)年に順正女学校校舎を増築したのは江川三郎八である²³。



写真4 高梁基督教会堂

和気郡和気町の法泉寺本堂は、塩飽大工・大石四郎左衛門の設計により1878年に完成した。長崎のグラバー邸の流れをくむヴェランダ系擬洋風建築である。ベリ―邸より早く日蓮宗の教会所がヴェランダ系擬洋風とされたことは興味深い。

2. わが国における洋風建築のはじまり

1878(明治11)年に竣工した岡山県庁は、典型的な擬洋風建築である。ファサード中央に大型ペディメントを配するデザインは、1861(文久元)年にオランダ人技師ハルデスが完成させた長崎製鉄所に登場する。

わが国に洋風の建物を広めたのはハルデスやイギリ

ス人のウォートルらである。ウォートルスは 1867(慶応3)年、薩摩藩の求めに応じ集成館にわが国初の紡績工場を建て、1871(明治4)年には大阪造幣寮や泉布観(写真5)、東京の竹橋陣営を設計し、1873(明治6)年には銀座赤煉瓦街を完成させている²⁴。

一方横浜ではアメリカ人のプリジェンスが擬洋風建築を建てた。1872(明治5)年に開業した新橋駅と横浜駅もプリジェンスの設計で、プリジェンスに師事した清水喜助や林忠恕が第一国立銀行や内務省、駅通寮などの擬洋風建築を手がけた。京浜間にはウォートルスやプリジェンス党の技術者らが建てたコロニアル建築多数が現れたのである。



写真5 泉布観

(1) 擬洋風と「民の系譜」

ウォートルスやプリジェンスの建物をコロニアルと書いたのには訳がある。彼らは建築家ではなく、貿易から建設まで、商売になるものなら何でも請け負った冒険者である。したがって、世界屈指と言われた銀座赤煉瓦街のプロポーシオンやデザインも、西洋建築の手法に則ったものではなかったのである。しかし京浜間に現れたコロニアル風建築はたちまち全国に飛び火した。それらは、棟梁らが見よう見まねで建てたモノマネ洋風建築である。1875(明治9)年、長野県松本市の開智学校を建てた立石清重も、ウォートルスやプリジェンス党の建てた洋風建築から得たインスピレーションを元に、棟梁の技を活かしたのである。擬洋風建築とは、冒険者たちが持ち込んだデザインを咀嚼し、棟梁らが建てた洋風の建物を指すが、それらは「民の

系譜」に分類される²⁵。

冒険者たちが持ち込んだ建物の「西洋」がどのように波及していったかは、藤森照信の著書に詳しい。藤森は擬洋風の系譜を次のように話す。

擬洋風は明治とともに始まり、10年前後にピークを迎え、20年以降には消えてゆくから、時代としては文明開化ときれいに重なる。わずか20年の生命であったが、形式は三系統に分かれ、まず幕末から明治初期にかけて“木骨石造系擬洋風”が先行し、ついで“漆喰系擬洋風”が現われてピークを飾り、その後、“下見板系擬洋風”に取ってかわられる²⁶。

また、擬洋風と棟梁たちの関係についてはこのように語る。

プリジェンスの木骨石造のコロニアル建築から清水喜助と林忠恕の木骨石造系擬洋風へ、さらに各地の漆喰系擬洋風へ、この変化の中で、林忠恕の生硬さも清水喜助の木に竹を継ぐ折衷性も克服され、開智学校に代表される新しい建築表現が生れているし、また、北海道のアメリカ直伝の下見板西洋館は山形に渡って下見板系擬洋風に変わる中で、単調な形を脱し、済生館に代表される謳いあげるような表現を生んでいる²⁷。

(2) 西洋建築における「官の系譜」

明治政府は、幕藩体制からの早期脱却と新体制の確率、江戸末期に列強との間に締結した通商条約の不平等改正を目的に文明開花を掲げた。その実現策が富国強兵策、つまり殖産興業の振興と軍備の増強であった。幕末にロシアのプチャーチンやアメリカのペリーが持参した鉄道模型が新橋・横浜間の鉄道開業に至ったのも、世間を驚かせるような出来事でなければ新しい時代の到来を国民に告げることができない、という外国官副知事・大隈重信や大蔵少輔・伊藤博文らの考えがあったからである。世間に訴えるのに最も効果的な政治手段が、鹿鳴館や銀座赤煉瓦街に代表される建築物

の西洋化であったのである。

東京官庁街の西洋建築化を計画したのは外務卿・井上馨と警視總監・三島通庸である。井上は鹿鳴館を建て、三島は山形・福島・栃木県令時代に擬洋風化を急いだ西洋建築推進論者であった。冒険者たちが建てた擬洋風建築が列強に誇れないことを理解した井上は、イギリスやドイツの建築家に鹿鳴館や官庁街を設計させると共に、邦人技術者の養成機関を設置することを考えた。こうしてイギリス人のコンドルや、ドイツ人のエンデやベックマンらお雇い外国人が招聘され、工部大学校の教壇に立ち、法務省などルネサンス様式の煉瓦建築を設計したのである。

工部大学校でコンドルの薫陶を受けた辰野金吾や片山東熊、妻木頼黄らは、イギリス式やフランス式、ドイツ式建築をわが国に広めた。コンドルから工部大学校を経て普及した建築様式を「官の系譜」または「お上の系譜」と呼ぶ²⁸。

(3) 学校建築の擬洋風化

寺子屋式教育に近代の光を当てたのは、1872(明治5)年に発布された太政官布告第40号・学制である。学校に、学びの空間という機能とは別に、新しい時代を象徴する要素を求めたのである。それが建物の洋風化であった。

1876(明治9)年山形県令に就任した三島通庸は、産業の近代化と共に西洋文化の普及と学校教育の向上に力を注ぎ、官庁や病院の新築、道路など交通インフラの整備、サクランゴを代表とする新製品の育成と共に、小学校の開設に積極的であった。こうして完成した県庁や橋梁、道路は、三島の命を受けた高橋由一が「山形市街図」や「酢川にかかる常盤橋」、「栗子山隧道図」などに描いた。現存する三島時代の木造建造物の代表は1878(明治11)年に竣工した済生館(写真6)である。その1年前の1877(明治10)年には東北最大の木造校舎である朝暘学校を完成させ、1880(明治13)年までに547の公立小学校を建てた²⁹。三島時代の山形県の建

築様式は下見板系擬洋風である。それは、1872年に始まった鶴岡藩士団の北海道・松ヶ岡開墾に由来する。開墾の成功を讃えた開拓使長・黒田清輝は、鶴岡藩に札幌の開拓使本庁舎付近での模範開墾を依頼した。札幌は、アメリカから渡来した下見板コロニアル建築が建てられた所である。山形県に普及したのは、鶴岡藩が札幌から持ち帰った下見板コロニアル建築を元にした、三島式下見板系擬洋風建築であった³⁰。



写真6 済生館

山形県の下見板系擬洋風に対して、長野・山梨・静岡県には漆喰系擬洋風の小学校舎多数が建てられた。静岡県は、チョンマゲを結う金を積み立てて、小学校建設費に当てるという断髪布告を出す程の力入れようであった。山梨県令に就いた藤村紫紅もこれに倣い、1874(明治7)年の琢美小学校や梁木小学校以降、多数の漆喰系擬洋風の小学校舎を建てた³¹。長野県に中込学校が現れたのは1875(明治8)年で、翌1876年には松本市内に開智学校(写真7)が完成する。

「民の系譜」である擬洋風の小学校が建てられたのは山形県や山梨県、長野県だけではない。各地の棟梁が競うように擬洋風を広めたため、全国の官庁や病院、教会、一般住宅が擬洋風の外観を纏った。ヴェランダ系擬洋風が長崎のグラバー邸から東に向かい、北海道から山形に飛び火した下見板系擬洋風が西に向かう中、木骨石造系擬洋風、漆喰系擬洋風、下見板系擬洋風と変化を遂げながら普及していったのである。



写真7 開智学校

3. 岡山県の小学校建築計画

小学校舎は当初、既存の建物からの転用が多かった。ところが、地域を象徴する建物とするために洋風化が図られるようになった。しかし政府や府県に、小学校をどのような様式にするべきかという共通認識がなかったため、その裁量は府県に一任された。その結果、個性を競う擬洋風校舎が日本中に現れたのである。

初期の学校建築に質的な転換をもたらしたのは、1882(明治15)年に制定された学校建築設計準則である³²。それは、急速に拡大する校舎の擬洋風化が招いた建築費の高騰、奇抜な意匠を追求したために起こった構造や雨仕舞、採光などの諸問題に起因する。性急な擬洋風化を反省し、回避しようとしたものであった。

文部省による学校建築を指導したのは山口半六³³と久留正道³⁴である。1885(明治18)年と1886(明治19)年入省した山口と久留は、1887(明治20)年に文部技師になった。建築指導は営繕組織をつくって進められたが、山口が退官した1892(明治25)年から1911(明治44)年の退官までは久留が組織の長を務めた。久留が入省した1886年に「小学校令」が公布され、1891(明治24)年の「小学校設備準則」、1892年の「小学校建築図案」、1895(明治28)年の「学校建築図説明及設計大要」、1904(明治37)年の「学校建築設計要項」などが出され、建築指導要綱は順次改正されていった。「小学校設備準

則」は、1899(明治32)年と1900(明治33)年の改正で「小学校設備規則」となり、教室の採光に配慮した北側片廊下、教室面積や仕様、必要に応じた講堂以外の「雨天体操場」の設置など、学習環境の充実を謳った。

岡山県においても、文部省の方針を踏まえた小学校建築の規定が制定・改訂された。岡山中学校は久留自らの設計である³⁵。

4. 江川三郎八

江川三郎八が岡山県技手に就任した1902(明治35)年は、「小学校設備規則」が出された2年後である。久留が道筋を立てた建築指導要綱を形にしてきた江川であったが、その業績は、清水重敦らの研究までは殆ど顕彰されなかったと言っても過言ではない。

1994(平成6)年に発行された『岡山県歴史人物事典³⁶』などにも江川に関する記述はなく、『岡山県史』や『倉敷市史』など市町村史にも江川を紹介する頁はない。江川の生涯を知るにはまず、江川本人が著した『生い立ち之記³⁷』を紐解かなければならない。

江川は1860(万延元年)、福島県で生れた³⁸。1887(明治20)年、宮大工から福島県職員となり、行政機関や学校の建設、橋梁工事などに携わった³⁹。1887年に山口半六⁴⁰、1898(明治31)年には妻木頼黄の薫陶を受けた⁴¹。また1901(明治34)年には久留正道らから学校建築の指導を受けたが⁴²、これは1900(明治33)年の「小学校設備規則」を受けてのことであろう。1902年の岡山県技手就任から逝去する1939(昭和14)年まで、県内の行政機関や学校、病院、個人宅など多数を設計した。現存する江川作品では、旧遷番尋常小学校校舎と旧旭東小学校附属幼稚園園舎が重要文化財、旧閑谷中学校本館、旧総社警察署、旧土居銀行本店、旧倉敷町役場、旧倉敷小学校附属幼稚園園舎が登録有形文化財、旧吹屋尋常高等小学校本館は県指定重要文化財である。その他、天満屋旧本館や金光教施設、個人病院や個人商店、個人宅などを手掛けている。

岡山県の近代化は、士族授産事業の金融業や、紡績業をはじめとする軽工業から起こり、港湾開発や開墾事業に拡大した。そして産業の裾野が広がるに連れて、一般事業家の台頭が本格化した。新興企業の社屋や工場は当初、日本建築や寺社建築を踏襲したものであったが、明治 10 年台から擬洋風となった。その代表が 1878(明治 11)年に完成した岡山県庁であり、1879(明治 12)年に竣工したジョン・ベリー邸、1882(明治 15)年に創業した玉島紡績所や下村紡績所などである。しかし明治 20 年代からは、「民の系譜」から「官の系譜」への脱皮が図られ、その中心となったのが江川である。

5. 江川建築

筆者が 2013(平成 25)年 11 月末までに確認した岡山県内に現存する江川建築を[表 1]に示す。「江川式」と呼ばれる江川特有の意匠を持ちながら、江川の設計であると断定するに至らなかった建物の掲載は見合わせた。また遺憾ながら、旧興譲館講堂(1916 年 写真 8)と旧勝間田農林学校本館(1923 年)は、2013 年までに解体された。

現存江川建築の中で最も古いと考えられているのが、1905(明治 38)年に竣工した旧閑谷中学校本館と旧金光中学校講堂である。『生い立ち之記』には、1902(明治 35)年に津山中学校の増築工事に従事したという記述がある。津山中学校とは重要文化財・岡山県立津山高等学校旧本館である。津山中学校と同じ 1900(明治 33)年に完成した岡山中学校と高梁中学校の校舎は現存しないが、どちらも久留正道の設計ではないかと考えられている。増築を含めると、江川が手掛けた県内最古の物件は旧津山中学校本館になる。

『生い立ち之記』に記された最新物件は、金光教教義講究所とその付属施設である。江川は 1923(大正 12)年、64 歳で岡山県を依願退職し、その後は天満屋旧本館や個人商店、個人宅の設計、1928(昭和 3)年からは金光教技師として教団施設の造営に当たっている。金

光教教義講究所は現在の金光教学研究所で、1930(昭和 5)年に竣工している。清水重敦の調査によると、笠岡市の旧中備素麵同業組合事務所も 1930 年の完成である⁴³。つまり、この 2 棟が現在確認できる最も新しい建物ということになる。

難波好幸は、江川が設計したと思われる建物にはまだまだ発掘の余地があると話す。筆者が調査した建物の中にも「江川式」に似た意匠を持つものがある。

表 1 現存する江川建築

名称	竣工年	所在地
旧閑谷中学校本館	1905(明治 38)年	備前市
旧金光中学校講堂	1905(明治 38)年	浅口市
旧遷喬尋常小学校校舎	1907(明治 40)年	真庭市
旧旭東小学校附属幼稚園園舎	1908(明治 41)年	岡山市
旧吹屋尋常高等小学校本館	1909(明治 42)年	高梁市
旧誕生寺尋常高等小学校校舎	1910(明治 43)年	赤磐市
旧総社警察署	1910(明治 43)年	総社市
旧勝田郡役所	1912(明治 45)年	勝央町
旧平井医院	1914(大正 3)年	瀬戸内市
旧倉敷小学校附属幼稚園園舎	1915(大正 4)年	倉敷市
旧矢掛中学校明治記念館	1915(大正 4)年	矢掛町
旧倉敷町役場	1916(大正 5)年	倉敷市
金光教徒社	1916(大正 5)年	浅口市
旧永井歯科医院	1916(大正 5)年	和気町
定金家住宅	1917(大正 6)年か	浅口市
旧長田医院	1918(大正 7)年	瀬戸内市
旧土居銀行本店	1920(大正 9)年	津山市
中村医院	1921(大正 10)年	倉敷市
金光教修徳殿講堂	1926(大正 15)年	浅口市
金光教学研究所	1930(昭和 5)年	浅口市
旧中備素麵同業組合事務所	1930(昭和 5)年	笠岡市



写真8 旧興讓館講堂

6. 「江川式」の特徴



写真9 旧遷喬尋常小学校校舎

江川三郎八が設計した建物には、官公庁や学校、病院、宗教施設、個人病院、個人宅の別を問わず、全てに共通したプロポーションと「江川式」意匠が現れる。江川本人も、岡山県に着任した1902(明治35)年、最初の仕事として取り組んだ岡山県高等女学校講堂と雨天体操場に採用した小屋組みを「江川式小屋組」と呼んでいる⁴⁴。

旧遷喬尋常小学校校舎(写真9)は、西洋建築に見られる絵画的なプロポーションとは一線を画し、少々重厚である。マンサード屋根の上には屋根飾りを配し、ファサードは玄関を中心に左右を対称、外観は下見板張りとし、縦目線を基本とする。大屋根にはドーマーウィンドーを置き、筋交い状のハーフティンバーでアクセントを付けている。筋交いや柱などには面取りを施す

など、仕上がりへの強いこだわりが感じられる。玄関に飾られた方杖状のアーチも「江川式」の特徴である。

旧土居銀行本店(写真10)は、1909(明治42)年に竣工し、1945(昭和20)年に焼失した岡山県議事堂に似たファサードを持つ。旧岡山県議事堂とは異なり、ポーチを持たない正面玄関の上部には、ファンライトやブローケンペディメント、楕形ペディメントを配する。これも「江川式」の特徴である。



写真10 旧土居銀行本店



写真11 旧倉敷町役場

旧倉敷町役場(写真11)や旧総社警察署、旧勝田郡役所には塔屋が付けられている。塔屋には記念碑的な意味を持たせる場合があるが、3棟には街の顔としての意味を持たせたのではないであろうか。旧倉敷町役場は、江戸情緒あふれる倉敷河畔の伝統的建造物群保存

地区の中心にある。窓上部は、1階がペディメント、2階は楕形ペディメントとし、1・2階の窓間にはスティックワークを施している。

旧金光中学校講堂(写真12)や旧遷喬尋常小学校校舎、旧土居銀行本店には二重折り上げ格天井があるが、旧吹屋尋常高等小学校本館や旧旭東小学校附属幼稚園園舎、旧倉敷小学校附属幼稚園園舎は竿縁天井である。旧金光中学校の講堂両側に柱が立てられていることに注目した難波好幸は、江川が宮大工出身で、金光教修徳殿講堂などの設計にも携わったことから、神社建築の構造を採用したのではないかと話す。



写真12 旧金光中学校講堂

筋交いや柱などの面取りに江川のこだわりが感じられると述べたが、仔細に観察すると江川独特の表現がより細部にまで及んでいることに驚かされる。それは、雨樋や基壇の煉瓦積みと通風口のデザイン、天井のレリーフや飾り格子、蛇腹を支える持送りや教室の黒板や警察署の受付カウンターを支える持送りのデザインにあたりする。旧総社警察署の螺旋階段付近の意匠も特筆に値する。

旧興讓館講堂を実測調査した難波は、梁と梁、窓と窓の距離などが、旧遷喬尋常小学校校舎のそれと共通することを発見した。両建物共、広い空間を演出するために教室内に柱を立てず、窓側の柱の太さを十分に取った設計である。それは、旧旭東小学校附属幼稚園園舎と旧倉敷小学校附属幼稚園園舎の八角形遊戯室にも当てはまることで、遊戯室中央の柱を外しても天井

を支えることができる設計である。

雨天体操場は、1900(明治33)年に出された「小学校設備規則」が規定し、1902年、江川が岡山県での初仕事として取り組んだ岡山県高等女学校に設けたが、旧吹屋尋常高等小学校本館にもその跡がある。後年板張りに変更された幅3間、長さ17間の雨天体操場は1階の一番奥にあり、「三間廊下」と呼ばれている。天井の木製トラスは2階の講堂を支えるためのもので、福島時代に修得した確かな構造計算力を誇る部分である(写真13)。竣工当時の旧吹屋尋常高等小学校本館に玄関ポーチはなく、屋根にはドーマーウィンドーが置かれていた。しかし後年、ドーマーが取り除かれ、玄関ポーチが取り付けられたようである。



写真13 旧吹屋尋常高等小学校本館

おわりに

わが国の擬洋風建築は明治20年代以降消滅したとされているが、江川が岡山県に広めたのは「官の系譜」の洋風建築の姿とは異なる。しかし、プリジェンス党の清水喜助や林忠恕、開智学校を建てた立石清重らの擬洋風とは一線を画す。もしも福島県の宮大工がそのまま官公庁の普請を担っていたら、県令・高崎五六が指揮する岡山県の近代建築は、県令・三島通庸が陣頭

指揮を執った山形県並みの擬洋風になっていたのかもしれない。

ところが江川は、岡山県に技手として就任する直前、山口半六や久留正道、妻木頼黄、伊藤忠太^{4 5}らの「官の系譜」に触れている。橋梁工事にも携わり、トラスやアーチの設計を修得するなど^{4 6}、西洋伝来の工法にも造詣を深めていた。1900(明治33)年に「小学校設備規則」が出された岡山県にあって、江川が果たした役割の重要性を理解するのは難しくない。

1907(明治40)年の「小学校令」改正では、尋常小学校が6年の義務教育とされ、学校の拡張が急がれた。就学児童の急増と共に、学年別児童数の差が小さくなったのである。このことも、学校建築における定型化の必要性に拍車をかけた。1908(明治41)年、岡山県は「小学校設備規則」を廃し「学校設備要綱」を纏めたが、その後増築を必要とした小学校は312校にのぼった。つまり、「江川式」建築が岡山県の定石として建てられることになったのである。

古写真を調べるだけでも、「江川式」であると考えられる建物は相当数にのぼる。その全てを、江川一人が設計したとは考えにくい。江川に師事、あるいは部下として江川の指導を仰いだ技術者が「江川式」を広めたとも考えられる。

難波好幸は岡山県立東岡山工業高等学校の教諭で、

建築士として江川建築の研究を続けている。森俊弘は真庭市教育委員会社会教育課の主幹で、旧遷喬尋常小学校校舎の研究と江川建築の古写真蒐集を続けている。小椋美紀は浅口市立金光歴史民俗資料館の学芸員で、金光教の江川建築の研究を行い、2011(平成23)年には同館で「天才建築科江川三郎八展」を開催している。我々は2013年、江川と江川建築の顕彰を目的とした研究チームを立ち上げ、活動を開始した。また、岡山県教育庁文化財課主幹の尾上元規にも指導を仰ぐことにした。今後は、古写真や資料から「江川式」建築物の悉皆調査と可能な限りの実測調査を行いながら、より多くの研究者とも情報を交換し合いながら江川研究を続ける所存である。

謝辞

小稿を纏めるにあたっては、次の方々から情報や資料の提供、教授を賜わった。芳名を記させていただくことで謝辞とさせていただきたい。

赤木和郎氏、江見正暢氏、小椋美紀氏、難波好幸氏、長谷川一英氏、平松修一氏、松岡久夫氏、森俊弘氏、浅口市立金光歴史民俗資料館、岡山県立岡山東工業高等学校、岡山県立図書館、岡山市埋蔵文化財センター、高梁市教育委員会、真庭市教育委員会(順不同)

注・引用

¹ 奈良文化財研究所編『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』(高梁市教育委員会、2005年)。

² 巖津政右衛門監修『目で見る岡山の明治』(日本文教出版、1986年)。

³ 山陽新聞社編『写真集 岡山県民の明治大正』(山陽新聞社出版局、1987年)。

⁴ 河原馨『岡山ハイカラ建築の旅』(日本文教出版、1998年)。

⁵ 河原馨『岡山の木造校舎』(日本文教出版、2007年)。

⁶ 前掲『写真集 岡山県民の明治大正』、65頁。

⁷ 江川三郎八『生い立ち之記』(私家版、1929年)、81頁。

- ⁸ 上田恭嗣「岡山県の近代建築」(岡山県教育庁文化課編『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書』、岡山県文化財保護協会、2005年)、45頁。
- ⁹ 大林進「菱川吉衛」(岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』、山陽新聞社、1994年)、836頁。
- ¹⁰ 『日本鉄道請負業史 明治篇』(鉄道建設業協会、1967年)、254頁。
- ¹¹ 『日本鉄道請負業史 大正・昭和(前期)篇』(日本鉄道建設業協会、1978年)、442頁。
- ¹² 前掲書、407頁。
- ¹³ 前掲書、569頁。
- ¹⁴ 前掲書、601頁。
- ¹⁵ 門司駅は1891(明治24)年4月1日、九州鉄道門司駅として開業し、鉄道国有法施行後の1907(明治40)年7月1日、鹿児島線門司駅となった。1914(大正3)年には二代目駅舎に建て替えられ、関門鉄道隧道開通後の1942(昭和17)年4月1日、門司港駅に改名された。(石野哲編『停車場変遷大事典』Ⅱ、JTB、1998年、673頁)。
- ¹⁶ 片野博『北九州市の建築』(北九州市企画局企画課、1989年)、1頁。
- ¹⁷ たつのきんごは、明治の代表的建築家。1854(嘉永7)年に生れ、1919(大正8)年逝去した。工部大学校を第1回生として卒業後、イギリスでJ. コンドルの師・W. バージェスの事務所にて修行した。帰国後は工部大学校教授に就任し、造家学会(現在の日本建築学会)の創立にも参加し、30余年に渡り建築アカデミーの指導者を務めた。東京帝国大学工科大学長を退官後は、辰野・葛西事務所や辰野・片岡事務所を設立し、銀行建築や保険会社建築、駅舎、個人宅などを幅広く設計した。代表作は日本銀行本店・大阪支店・小樽支店・京都支店、東京駅舎、松本健次郎邸など。(彰国社編『建築大辞典』第2版、彰国社、2009年第11刷、1,003頁)。
- ¹⁸ 岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第17巻年表(岡山県、1991年)、322頁。
- ¹⁹ 蓬郷巖『岡山縣廳物語』(日本文教出版、1963年)、51頁。
- ²⁰ 小野一成「鹿島岩蔵とその時代」(鹿島建設総務部本社資料センター編『鹿島岩蔵 小傳 没後百年記念』、鹿島建設、2011年)、14頁。
- ²¹ 前掲書、52～63頁。
- ²² 前掲書、17頁。
- ²³ 江川前掲書、91頁。
- ²⁴ 藤森照信『日本の近代建築』上(岩波書店、1993年)、68～82頁。
- ²⁵ 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』(日本放送出版協会、1977年)、23～24頁。
- ²⁶ 藤森前掲書、90頁。
- ²⁷ 前掲書、133頁。
- ²⁸ 村松前掲書、22～23頁。
- ²⁹ 山形県立博物館編『三島通庸と洋風学舎-近代やまがたの学校-』(山形県立博物館友の会、2010年)、25頁。
- ³⁰ 藤森前掲書、122頁。
- ³¹ 前掲書、105～106頁。
- ³² 清水重敦「学校建築における近世-近代 建築技術者江川三郎八の活動から」(至文堂編『日本の美術』第538

号、ぎょうせい、2011年)、86頁。

- ³³ やまぐちはんろくは、明治期に文部省で活躍した建築家。1858(安政5)年に生れ、1900(明治33)年逝去した。文部省派遣留学生としてパリの中央工業専門学校を卒業した。1885(明治18)年から1892(明治25)年まで文部省で久留正道らと共に学校の設計に携わった。日本人初の近代都市計画者でもある。現存する代表作に、旧制第一から第五高等学校の校舎、東京音楽学校奏楽堂、兵庫県庁などがある。八幡製鉄所旧本部も山口の設計である可能性が指摘され、事実であれば山口最後の設計となる。(中川理「山口半六」小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞社、1994年、1,735頁)。
- ³⁴ くるまさみちは、明治期の文部省営繕課の技術者。1855(安政2)年に生れ、1914(大正3)年逝去した。工部大学校造家学科を卒業後、工部省の技師を経て、技師として退官まで文部省に勤務した。山口半六が文部省営繕を辞してからは、二代目の指導者となった。明治期の学校建築の基本型となる「学校建築図説明及設計大要」を完成したと言われている。東京・京都両帝国大学、第一から第五高等学校、札幌農学校、帝国図書館、京都府庁舎などを手がけた。(初田亨「久留正道」小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞社、1994年、599頁)。
- ³⁵ 前掲『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』、44～48頁。
- ³⁶ 岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社、1994年)。
- ³⁷ 江川三郎八『生い立ち之記』(私家版、1929年)。
- ³⁸ 前掲書、1頁。
- ³⁹ 前掲書、31頁。
- ⁴⁰ 前掲書、35頁。
- ⁴¹ 前掲書、67頁。つまきよりなかは、明治の代表的な官僚建築家。1859(安政5)年に生れ、1916(大正5)年逝去した。工部大学校造家学科を中退後、アメリカのコーネル大学を卒業した。東京府御用掛で中央官庁街の建設中、ドイツのエンデ・ベックマン事務所に派遣された。帰国後は内務省技師として官庁建設に携わった。現存する建築物の代表は、1904(明治37)年竣工した横浜正金銀行本店(現在の神奈川県立博物館)などである。(彰国社編『建築大辞典』第2版、彰国社、2009年第11刷、1,102頁)。
- ⁴² 江川前掲書、73頁。
- ⁴³ 前掲『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』、55頁、60頁。
- ⁴⁴ 江川前掲書、82頁。
- ⁴⁵ いとうちゅうたは、日本最初の建築史家で建築評論の開拓者。1867(慶応3)年に生れ、1954(昭和29)年逝去した。東京帝大造家科を卒業後、同大学院で建築史家の開拓者となった。岡倉天心の影響から中国に渡り雲崗石窟を発見し、ミャンマーやインドの建築源流を研究した。日本建築史の学術的体系の樹立や東洋建築の史的研究から1943(昭和18)年、建築学界初の文化勲章を受章した。1893(明治26)年の平安神宮、1920(大正9)年の明治神宮、1934(昭和9)年の築地本願寺などの作品がある。(彰国社編『建築大辞典』第2版、彰国社、2009年第11刷、91頁)。
- ⁴⁶ 江川前掲書、56～60頁。

参考文献

- 巖津政右衛門監修『目で見る岡山の明治』、日本文教出版、1986年
- 江川三郎八『生い立ち之記』、私家版、1929年
- 岡山県教育庁文化課編『岡山県の近代化遺産-岡山県近代化遺産総合調査報告書』、岡山県文化財保護協会、2005年
- 岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第17巻年表、岡山県、1991年
- 岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』、山陽新聞社、1994年
- 鹿島建設総務部本社資料センター編『鹿島岩蔵 小傳 没後百年記念』、鹿島建設、2011年
- 片野博『北九州市の建築』、北九州市企画局企画課、1989年
- 河原馨『岡山の木造校舎』、日本文教出版、2007年
- 河原馨『岡山ハイカラ建築の旅』、日本文教出版、1998年
- 小泉欽司編『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞社、1994年
- 山陽新聞社編『写真集 岡山県民の明治大正』、山陽新聞社出版局、1987年
- 至文堂編『日本の美術』第538号、ぎょうせい、2011年
- 彰国社編『建築大辞典』第2版、彰国社、2009年第11刷
- 奈良文化財研究所編『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』、高梁市教育委員会、2005年
- 『日本鉄道請負業史 明治篇』、鉄道建設業協会、1967年
- 『日本鉄道請負業史 大正・昭和(前期)篇』、日本鉄道建設業協会、1978年
- 藤森照信『日本の近代建築』上、岩波書店、1993年
- 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』、日本放送出版協会、1977年
- 山形県立博物館編『三島通庸と洋風学舎-近代やまがたの学校-』、山形県立博物館友の会、2010年